

実践報告

西九州大学子ども学部における子育て支援活動  
—「子どもミュージアム」平成24年度の活動報告—

田中麻里・大城あゆみ

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成26年2月17日受理)

**Child rearing support activities in Faculty of Children's Studies in Nishikyushu University:  
Of fiscal year 2012 "Children's Museum" activity report**

Mari TANAKA and Ayumi OHSIRO

*(Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University)*

(Accepted February 17, 2014)

実践報告

西九州大学子ども学部における子育て支援活動  
—「子どもミュージアム」平成24年度の活動報告—

田中麻里・大城あゆみ

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成26年2月17日受理)

**Child rearing support activities in Faculty of Children's Studies in Nishikyushu University:  
Of fiscal year 2012 "Children's Museum" activity report**

Mari TANAKA and Ayumi OHSIRO

*(Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University)*

(Accepted February 17, 2014)

**Abstract**

Looking back and performance activities of fiscal year 2012, this report was verified significance of hands-on activities in the Children's Museum, about the purpose.

As impressions of activity after participating parents, 42% satisfied, 52% satisfaction, approximately 90% are answered very satisfied. It must be taken very seriously the opinions of somewhat unsatisfactory 4% in addition. In addition, 79% of you want to join, rejoin hope for this activity was 21% you want to participate if the opportunity arises.

Students who responded that there has been learned caregivers, as educators from questionnaire by students account for nearly 90% of the total, it can be seen that it is a meaningful activity.

Consider implementation of the contents of the 2013 fiscal year in line with the needs of children and their parents, which in the light of the implementation results of fiscal 2012 from fiscal 2009, to join first, and then perform the validation in the future.

In addition, that for teaching methods to promote the principal activity of the students, to go repeated studies while performing exchange opinions among reaches is desired.

Key word : Child Rearing Support 子育て支援  
Experience Learning 体験学習  
Support Training 支援者養成

## 1. はじめに

本学における子育て支援事業「子どもミュージアム」は、①子育て・子育てのための地域支援活動、②地域に開かれた大学づくり、③保育・教育者を志す学生の実践活動の3つを目的とし、子ども学部新設の平成21年度から継続して実施している活動である。

その統一テーマを「子ども文化の創造」とし、身体遊び、音遊び、おはなし、伝承遊び、科学や身近な自然にふれる活動などを企画実施している。活動は子ども学部子ども学科の授業の一環で実施し、教員指導のもと学生達による主体的な企画と実践を行っている。

また、子ども（乳幼児から小学生まで）と保護者、学生、教職員の参加者全員が「子どもミュージアム」での実践活動を通して、人とのつながりを意識、実感しながら、現在の自分が必要とするものを体得できる機会となることを目指している。

自分に必要なものとは、1) 子どもであれば、他者と交わりながら行う遊び体験の積み重ねで身につく社会性や協調性、2) 保護者は育児中である自身のリフレッシュや振り返り、家族との暮らしについて将来の方向性の模索など、3) 学生は、①参加する子どもの年齢、性別、参加回数の事前情報を把握し、子どもたちが満足できる有意義な活動をイメージし準備を行う力、②本番活動中の子どもたちの表情や動き、反応を観察する力、③保護者との会話力、④学生間の役割分担意識とより積極的な協力的体制力などの行動力が挙げられる。4) 教職員においては、学生の主体的活動を尊重しつつ、準備段階で必要な情報提供、活動時の安全面への配慮、参加する子どもや保護者の思いを代弁するなど、必要な時を見極め助言する力、また学生の意欲を向上させる指導力などが挙げられる。

本報告は平成24年度の活動内容と実績を振り返り、「子どもミュージアム」における実践活動の意義、目的に関する検証を行った。

なお、平成21年度から平成23年度までの活動内容と実績は西九州大学子ども学部紀要第4号（2013）に資料として掲載している。

## 2. 平成24年度の活動内容と実績

平成21年度よりスタートした本活動は、1年目を

導入期、2～3年目を展開期、新設子ども学部が完成年度を迎える4年目（平成24年度）を完成の年として検討を重ね現在に至る。本活動の趣旨や内容に興味関心を持ち参加をされた人は、平成24年度が399名、21年度から24年度までの累積延べ人数は1,304名となった（表1参照）。

表1. 子どもミュージアム参加人数（年度別）

平成24年度	12回	165家族(子ども233名)	399名	1304名 合計
平成23年度	10回	70家族(子ども103名)	193名	
平成22年度	8回	116家族(子ども145名)	274名	
平成21年度	11回	92家族(子ども108名)	438名	

平成24年度（開催12回）の参加人数は399名で、前々年22年度（開催8回）より125名増（4回増）、前年23年度（開催10回）より206名増（2回増）であった。回数増に伴う活動内容に対する期待が一因となる結果であった。

### (1) 開催スケジュール

年12回のうち、平日（木曜日・小学生夏休み中火曜日）と土曜日に実施した。主なスケジュールは以下に示す。

#### 木曜日開催※小学生夏休み中火曜日1回

10:15～	受付開始
11:00～12:00	ミュージアム開催
12:00～14:00	施設開放
14:00～	片付け・環境整備

#### 土曜日開催

09:30～	受付開始
10:00～12:00 (10:30～11:45)	ミュージアム開催
12:00～	片付け・環境整備

### (2) 場所

昨年度までと同様に、西九州大学神園キャンパスの3号館1階3室（子育て支援室、保育演習室、表現スタジオ）、理科実験室、体育館および大学周辺の公園や河川敷等にて行った。体育館での活動について、7月下旬の酷暑の中での実施となり、室内温度の管理が困難な状況であったため、参加者の水分補給や体調不良者が出た際の対応など事前の対策が必要であった。

また、木曜日開催の12時から14時までは、初年度より施設開放の時間帯としており、子育て支援室と

保育演習室（遊具，絵本，授乳室，幼児用トイレ，おむつ交換台，子ども用ベッド，飲食可能なスペースあり）を開放している。施設開放時の利用者実数の算出は行っていないが明らかに増加傾向にあるため，環境整備を含めた利用者のニーズ調査等を検討する必要性が窺える。

### （3）活動内容（別添資料1参照）

平成24年度の活動12回のうち，大学の学年歴上の前期（4月～9月）6回，後期（10月～3月）6回で回数上は均等である。前年度までの開催曜日に着目すると，前期は乳幼児対象の木曜日開催が多く，後期に小学生対象の企画が集中していたことから，24年度は，前期に3回の小学生対象の企画を小学生の夏休み期間を利用して設けた。

表2に示したテーマ／内容を分野別にみると，身体遊び（1企画），音遊び（1），おはなし（3），伝承遊び（1），科学や身近な自然にふれる活動（2），木や紙など身近なものを使った遊び（4）を企画実施した。おはなしについては，絵本，紙芝居のほかパネルシアターやエプロンシアターなども取り入れ実施した。

## 3. 参加者のアンケート結果

初年度から開催毎に，すべての保護者と小学生にアンケートを実施している。平成24年度の結果を以下に示す。

### （1）保護者

<アンケート項目>

- 性別，年齢，家族構成，仕事のスタイル
- 参加回数
- 本活動の情報入手先
- 子育て全般に関する情報入手先
- 子育てに関する心配事や不安について
- よく利用する子育て支援施設や催し・活動について
- 本活動に参加した理由
- 本活動の評価（4段階）および感想
- 本施設に関する気づき
- 今後企画してほしい内容

本活動に参加した理由は，多い順に「子どもが喜びそうだから」122名，「講座の内容に興味があったから」65名，「友人に誘われて」が38名，少数回答で「近所だから」が9名，「大学（施設）の見学」1名であった（図1）。

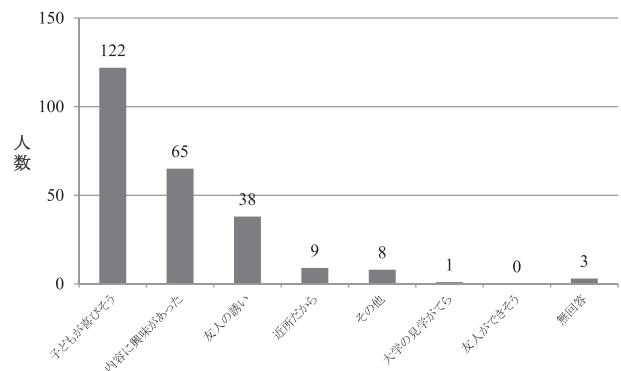


図1 保護者の参加理由（複数回答可）

表2. 平成24年度子どもミュージアム活動内容等

	開催日	曜日	テーマ／内容	対象	担当	定員
第1回	5月24日	木	楽器で遊ぼう	乳幼児	櫻井（子ども）	15組30名
第2回	6月7日	木	おはなしってたのしい	幼児	金久（子ども）	制限なし
第3回	6月28日	木	絵本小劇場	乳幼児	高尾（子ども）	15組30名
第4回	7月26日	木	体をつかって遊ぼう	幼児・小学生	松本（子ども）	制限なし
第5回	8月28日	火	田んぼの生きものたんけん隊	小学生	上赤（子ども）	20名
第6回	11月15日	木	親子で遊ぼう（身近な材料を使った遊び）	乳幼児	赤星（子ども）	15組30名
第7回	11月29日	木	“紙”で遊ぼう	乳幼児	田中（子ども）	20組40名
第8回	12月1日	土	身近なふしぎ（科学の不思議，実験）	幼児・小学生	平田（子ども）	12名
第9回	12月8日	土	ようこそ紙芝居の世界へ	幼児～小学2年生	香川（子ども）	制限なし
第10回	1月19日	土	みんなであそぼう（おすもう）	幼児・小学生	松尾（子ども）	制限なし
第11回	1月26日	土	“木”であそぼう	幼児・小学生	田中（子ども）	20組40名
出前	9月8日	土	楽つみきで遊ぼう	小学生	佐藤（子ども）	—

活動参加後の感想として、図2に示すように「非常に満足」42%、「満足」52%で、およそ9割が満足と回答している。加えて「やや物足りない」4%の意見も真摯に受け止めていかなければならない。

また、本活動への再参加希望は「ぜひ参加したい」79%、「機会があれば参加したい」が21%であった(図3)。

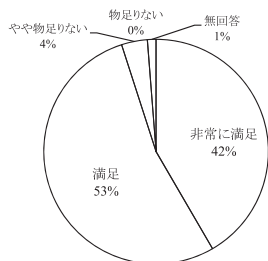


図2 保護者の満足度

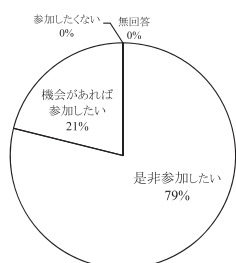


図3 今後の参加希望 (保護者)

今後、希望する企画内容や活動への要望などが以下のようにあげられた。中でも、運動遊びや楽器遊びの要望が多く、次いで自宅で遊ぶ時より自由のびのびと活動できる製作活動も多かった。また、数名から乳児向けや障がい児向けの講座の希望もあった。

- ・体操運動
- ・音楽、楽器を使ったあそび
- ・リトミック
- ・気ぐるみショーみたいなもの (アンパンマンとか)
- ・製作 (おもちゃ作りなど)
- ・影絵
- ・クレヨンや絵の具を使ったお絵かき
- ・水あそび、粘土あそび
- ・子ども用プールをしてもらいたい (水遊びでもOK)
- ・田んぼ、川探検、魚とり
- ・実験 (理科など)
- ・巨大迷路
- ・お店屋さんごっこ
- ・自閉症むけの講座、発達障がい児むけのもの

・土日は父親が休みでのため家族全員で過ごす時間にあてることが多いので、幼稚園・小学校が対象なら家族全員で参加する企画、または平日の午後に開催してもらって参加しやすい。わらべうたや手遊びなども最初や最後にやったらもっといいと思う。小さい子(0, 1歳)がもっと活動しやすい、活動できる企画を考えてほしい

## (2) 子ども (小学生)

平成24年度の小学生の参加人数は31名(男子14名、女子17名)で、学年の内訳は1年生5名(男子1名、女子4名)2年生9名(男子6名、女子3名)、3年生2名(男子)、4年生1名(男子)、5年生1名(男子)、6年0名であった。なお、出前講座の参加13名の学年内訳は未確認であった。

アンケートの結果を以下に示す。

<アンケート項目>

- 性別
- 小学校名
- 学年
- ミュージアムの参加回数
- 今回参加した理由
- 今回の感想
- 次回のミュージアムに参加したいか

本活動に参加した理由は、多い順に「おもしろそうだったから」13名、「家の人が申し込みをしていたから」10名、「大学生に会いたかったから」6名、「友達の誘い」であった(図4)。

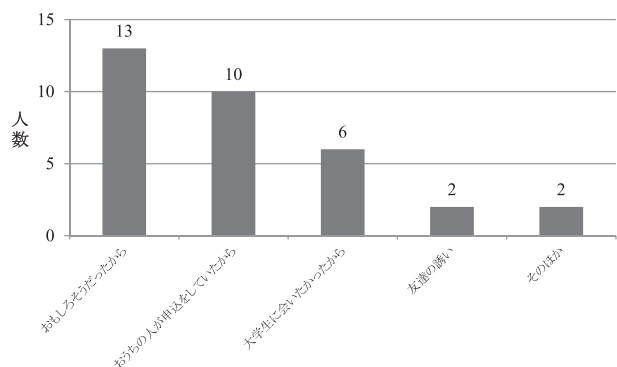


図4 小学生の参加理由 (複数回答可)

感想として以下の内容があげられた。

- ・いすとりゲームが楽しかった
- ・実習の先生にあえてうれしかった
- ・体育が苦手だからきてよかった

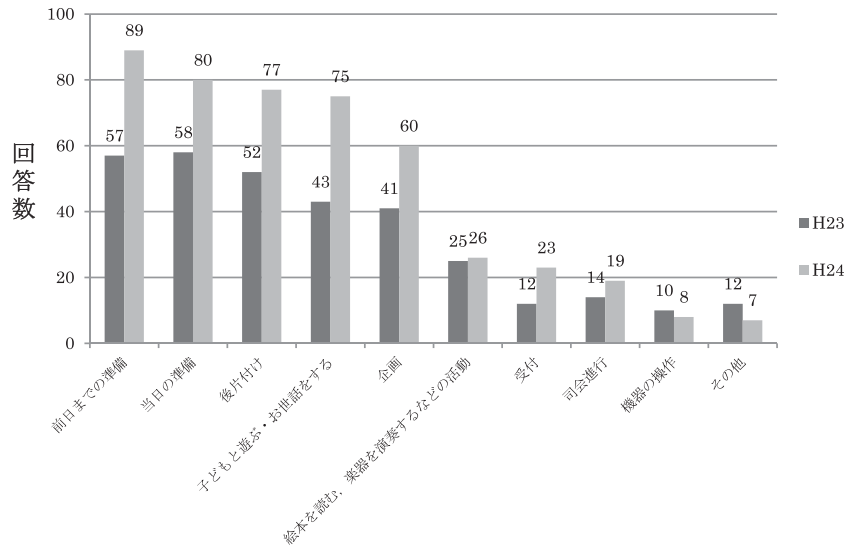


図5 参加学生の役割 (複数回答可)

- ・ブランコがしたかった
- ・けむりのじっけんがしたい
- ・さかなとりにいきたかった。
- ・レモン汁や重曹で色が変わるのはすごいと思った
- ・外でおにごっこをしたい
- ・外でドッチボールをしたい
- ・つみきの時間をもっと増やしてほしい
- ・つみきをかさねるのが楽しかった
- ・つみきがむずかしかった
- ・つみきでいろいろなものをつくってあそびたい
- ・もっとあそんでほしいかった
- ・もっとあそびたい
- ・こんどはみんなでもっと大きなタワーをつくりたい
- ・ドミノが難しかった。

#### 4. 学生のアンケート結果

平成23年度と24年度に参加した学生へのアンケートの項目と結果を以下に示す。

<アンケート項目>

- 子どもミュージアムでの役割
- 参加後の自己評価
- 参加してよかったか (4択回答)
- 機会があれば再参加したいか
- 子どもミュージアムで保育・教育者を志す者として学ぶことはあったか

図5に示すように、平成24年度の参加学生の役割

として、多い順に「前日までの準備」「当日の準備」、次いで「後片付け」「子どもと遊ぶ・お世話をする」「企画」、担当別の活動である「司会進行、受付、絵本を読む、楽器を演奏するなどの活動」は少数であった。23年度と24年度の割合に変化は見られなかった。

また、参加学生による自身の取組に対する評価を4段階(高い順に4・3・2・1)で示したものが図6である。平成23年度と24年度を比較すると、評価4の高評価をした割合は、23年度が全体の約4.5割、24年度は約2.5割で23年度のほうが高評価を行っていたが、評価3と4を合わせると両年とも約8割が高評価であった。自己の振り返りや省察が十

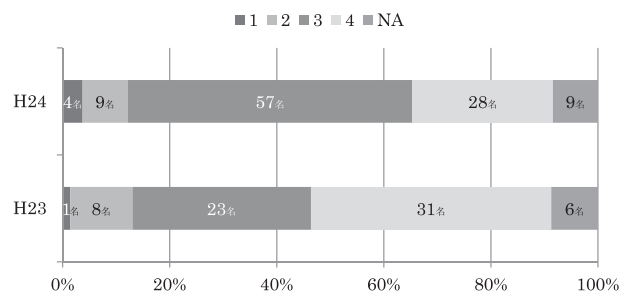


図6 子ども学科参加学生の自己評価

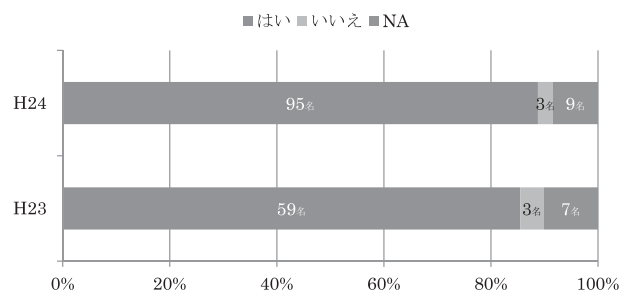


図7 保育者、教育者として学ぶことはあったか

分かどうかは測っていないが、実践活動を通じて自己の課題や達成感の表れの結果ともいえる。

これは図7に示す保育者、教育者としての学びに対する回答からも読み取れる。学ぶことがあったと回答した学生は全体の9割弱を占めていた。

学生の参加後の思いとして、23年度は「とてもよかった」と「よかった」をあわせて98%で、24年度との相違はみられなかった(図8)。

また、機会があれば再度参加するかの問いには、80~85%の学生が「参加する」と回答し(図9)、前年度に引き続き、子どもミュージアムでの経験が有意義であったと実感している学生が多いことがわかった。

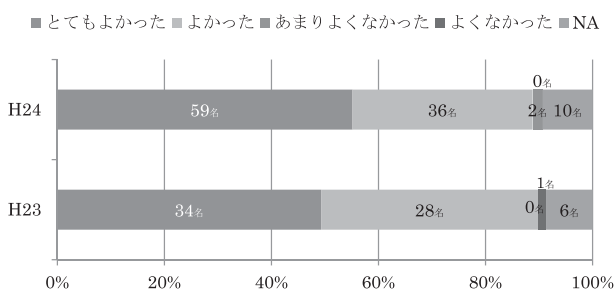


図8 参加して良かったか

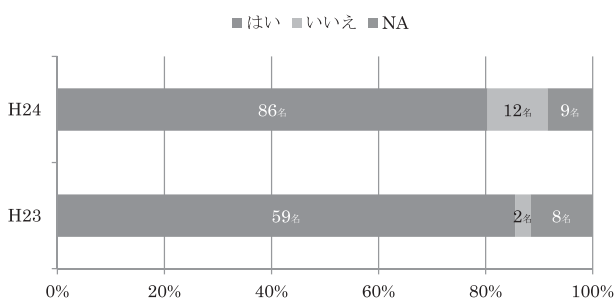


図9 再度参加するか

さらに、参加学生の保育者、教育者を目指す者としての気づきについて表3に示す。これは、参加後の振り返りシートの自由記述内容を22のカテゴリーに分け集計したものである。多数の学生が取り上げていた意見を多い順にあげると、「子ども達への声かけ、接し方、コミュニケーションのとり方」、「子ども達に分かりやすく伝えること難しさや方法」、「準備の大変さと大切さ」、「異年齢の子ども達への関わり方」、「教材研究や活動内容や企画の大切さ」、「活動環境への配慮」、「参加者が楽しく活動するためにどうするべきか」などが、また、「保護者とのコミュニケーション」「チームで活動する困難さ、大切さ」や、保育者、教育者としての技能である「話し方や音量」、「絵本の読み方」、「全体を見ながらの

活動」などに着目した振り返りを行っている学生の存在も確認できた。

## 5. おわりに

今後は、21年度から24年度の実施結果を踏まえて、まず参加する子どもや保護者のニーズにそった平成25年度以降の実施内容の検討、検証を行っていく。加えて、学生の主体的活動を促進するための指導法について、教員間で意見交換を行いながら検討を重ねていくことが望まれる。

検討課題として次の3点をあげる。

1) 平日の全体活動後の12時から14時まで行っている開放の有効な検討：保護者間の情報交換や子育て情報の発信の場と成り得るのではないかと。

2) 乳幼児と小学生(含むきょうだい児対応)の合同プログラムの検討：学生の意見にもあったように同じ空間と時間内で異年齢の子ども遊び提供がどこまで実現できるか、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生にとっては、格好の学びの場となる。

3) 学生のスキルアップ向上にむけた検討：①活動の目的をより明確に伝えるための指導法の検討、②継続的支援ではなく単発の企画実施を有効な活動とするための方策の検討(事前事後指導の在り方、振り返りの充実、自己評価に対する客観的な評価※友人または教職員による評価)、③学内外において活動報告や紹介を積極的に行うなどの振り返り活動の強化、④保護者とのコミュニケーション力を身につけるための指導法の検討

池田(2011)は、保育者養成校が実践する子育て支援活動での課題は現場で求められる子育て支援力は、単に親子に活動を提示する保育展開力だけでなく、保護者の不安等に気づき、支えることができる保護者支援力が必要不可欠であるが、そうした保護者対応の力を学ぶ機会をどのように提供し、教育的効果を挙げていく検討が必要と述べている。子ども学科の「子どもミュージアム」における活動においても保護者の気持ちを察し、支える手だてはどのようなことがあるのか活動を通じて意識を強化する取り組みを検討、試行していく必要があると考える。

表3. 参加学生の保護者、教育者をめざす者としての気づき

		H23	H24	計	Ex)
1	子ども達への声かけ、接し方、コミュニケーションの取り方	13	14	27	子どもにとって難しい言葉は使わない。一人で参加している子どもに楽しいと感じてもらえるように特に声かけに気をつけた。
2	子ども達に分かりやすく伝えることの難しさや方法	6	6	12	
3	準備の大変さ、大切さ（段取りを考える）	4	8	12	段取りが悪く上手くできない面があった。あらゆる場面を想定して準備することが大切だと分かった。
4	異年齢の子ども達への関わり方	5	7	12	同じ活動でも年齢や発達段階で、できることや手先の器用さに違いがあり、一人一人の状況に応じた支援をしてみんなで楽しめるようにする必要がある。ルールを年齢にあわせて変更して分かりやすくした。
5	教材研究や活動プログラム編成の大切さ（企画）	5	6	11	子どもが主体的・意欲的に取り組みたいと思えるような動機づけや遊びの提案、提供等について改めて学んだ。活動を通して子ども達に感じてほしいことや伝えたいことを考えて活動した。
6	活動環境への配慮	3	8	11	教材として使うビーズの誤飲が無いよう保護者へ呼びかけるなど危険防止を心がけた。
7	参加者が楽しく活動するためにはどうするべきか	4	6	10	親子で楽しめる工夫をした。育児で使える遊びを提供する工夫をした。
8	進行が計画通りに進まない時の対応（臨機応変さ）	2	6	8	子どもの実態にあわせてプログラムを進めていくこと。
9	発達段階にあわせた内容の大切さ	1	6	7	低学年には難しい活動で、すぐに飽きて別の遊びに移ってしまった。
10	保護者とのコミュニケーション	2	4	6	
11	チームで活動する困難さ、大切さ	3	2	5	リーダー：自分が動くのではなく他人に指示、指導する面での難しさを感じた。メンバーが集まらず準備が進まなかった。チームで話し合うことで違う意見を知れた。効率よく分担し、助け合って活動できた。チーム全員が把握している状態を作ることができ、進行の上でも大切だと実感した。
12	子どもの発想力（可能性）	3	2	5	
13	前で話す際の話し方や声量（役になりきる含む）	3	2	5	言葉遣いや表情に自信がないことや人前で話すことの経験不足を感じた。司会者は子どもが注目できる動きや工夫、ひきつける話し方が必要
14	絵本の読み方	2	1	3	絵本の楽しさを伝えるため表現の仕方を工夫した。絵本を読むだけでなく、効果音を入れたりした。
15	リハーサル、練習の大切さ	1	2	3	練習にやりすぎはないと思った。早い段階から準備したにもかかわらず直前まで準備に追われていた。
16	全体を見ながらの活動	1	2	3	
17	雰囲気作りの難しさ、大切さ	0	2	2	子どもたちを上手く盛り上げられなかった。
18	保護者がいる時の子どもへの対応や援助	1	0	1	
19	子どもの視点からの予想（質問など）	1	0	1	
20	子どもの発想を受けとめ遊びを広げる工夫が必要	1	0	1	
21	表情の作り方	0	1	1	
22	その他				楽しませながら学びをすすめることが難しかった。スライムに興味は持っても、どのようなのかという学びへの発展が難しかった。



## 参考文献

- 1) 田中麻里, 大城あゆみ 西九州大学子ども学部  
における子育て支援活動「子どもミュージア  
ム」の平成21年度から平成23年度の取組み 西  
九州大学子ども学部紀要 第4号 2013年  
pp. 53-59
- 2) 池田可奈子・椎山克己 子育て支援活動に携わ  
る学生の保育展開力に関する教育的効果の検討  
全国保育士養成協議会研究大会第50回研究大会  
研究発表論文集 2011年 pp. 452-453
- 3) 木村直子・原田蘭子 大学における子育て支援  
活動の役割—大学内の「赤ちゃんサロン」にお  
ける取組みからパート1—全国保育士養成協  
議会研究大会第51回研究大会研究発表論文集  
2012年 pp. 344-345

資料1.

平成24年度「子どもミュージアム」実績報告

開催回数：年間12回

開催スケジュール：木曜日開催※小学生夏休み中火曜日1回

土曜日開催

10：15～	受付開始	09：30～	受付開始
11：00～12：00	ミュージアム開催	10：00～12：00	ミュージアム開催
12：00～14：00	施設開放	10：30～11：45	
14：00～	片付け・環境整備	12：00～	片付け・環境整備

参加費（保険料）：1回につき、1家族100円

受付形態：事前電話予約

参加形態：小学1年生以下は保護者同伴

登録者数：74家族（子ども102名）

各回の開催日・内容・受付形態・参加人数：

	開催日	曜日	テーマ/内容	対象	担当	定員	参加家族数	参加人数	参加学生数
第1回	5月24日	木	楽器で遊ぼう	乳幼児	櫻井（子ども）	15組30名	27組	61名	子ども3年 9名
第2回	6月7日	木	おはなしてたのしい	幼児	金久（子ども）	制限なし	17組	36名	子ども3年 10名
第3回	6月28日	木	絵本小劇場	乳幼児	高尾（子ども）	15組30名	16組	33名	子ども3年 10名
第4回	7月26日	木	体をつかって遊ぼう	幼児・小学生	松本（子ども）	制限なし	31組	78名	子ども3年 11名
第5回	8月28日	火	田んぼの生きものたんけん隊	小学生	上赤（子ども）	20名	5組	10名	子ども3年 7名
第6回	11月15日	木	親子で遊ぼう（身近な材料を使った遊び）	乳幼児	赤星（子ども）	15組30名	22組	45名	子ども3年 7名
第7回	11月29日	木	“紙”で遊ぼう	乳幼児	田中（子ども）	20組40名	20組	40名	子ども3年 9名
第8回	12月1日	土	身近なふしぎ（科学の不思議、実験）	幼児・小学生	平田（子ども）	12名	7組	19名	子ども3年 8名
第9回	12月8日	土	ようこそ紙芝居の世界へ	幼児～小学2年生	香川（子ども）	制限なし	6組	15名	子ども3年 9名
第10回	1月19日	土	みんなであそぼう（おすもう）	幼児・小学生	松尾（子ども）	制限なし	4組	11名	子ども3年 9名
第11回	1月26日	土	“木”であそぼう	幼児・小学生	田中（子ども）	20組40名	10組	32名	子ども4年 12名
出前	9月8日	土	楽つみきで遊ぼう	小学生	佐藤（子ども）	—	—	19名	子ども3年 9名
						計	165組	399名	110名

平成24年度 12回 165家族（子ども233名） 399名 1304名 合計

平成23年度 10回 70家族（子ども103名） 193名

平成22年度 8回 116家族（子ども145名） 274名

平成21年度 11回 92家族（子ども108名） 438名